慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	シンガポール社会学再論
Sub Title	Reconsidering of Singapore Sociology
Author	橋本, 和孝(Hashimoto, Kazutaka)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2004
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.77, No.1 (2004. 1) ,p.447- 469
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	川合隆男教授退職記念号
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20040128-0447

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

シンガポール社会学再論

橋本和孝

はじめに
一　シンカポール社会学再論
二　シンカポールにおける社会学カリキュラム
　　―国立シンカポール大学（NUS）教養・社会科学部社会学科―
三　『シンガポール社会学の形成』をめくって
むすび

はじめに

手元に川合隆男教授と井田哲一氏が翻訳した「韓国社会学の先駆者　河敬徳」という論稿がある。その「訳者あとがき」で川合教授は、「わが国において、韓国社会学の動向についての紹介や研究、そして社会学界の交流はいまだに極めて不十分であるといわざるを得ないが」、特に「河敬徳に言及している文献は少なく、日本の植民地化のもとで、『韓国社会学の先駆者』とされる河敬徳の足跡を少しでも知ることは大切なことである」と、

翻訳の経緯について述べている。さらに社会学史研究も「近代『日本』の枠の中だけに閉じ込めるのではなく」、同時代史的な考察や検討が必要であり、社会学界が「韓日、日韓の間で、広くアジアの間で」の交流を行うよう願ってやまないと、結語を述べていた（安、一九八九：一一七―一一八）。

確かに、福岡から最も至近距離にある国であり、文化的にも都市景観的にも類似した要素が少なくない韓国の社会学について熟知している者は数少ない。そして、上記の指摘は、筆者がこれから展開しようとしているシンガポールをはじめとしたアジアの社会学についても、少なからず当てはまるだろう。そこで、本稿は、筆者がこの一〇年弱の間研究してきた国である、シンガポールの社会学を取り上げて、そこでの社会学の特質について検討しようと考えるものである。

一　シンガポール社会学再論

筆者は、既に二〇〇〇年「シンガポール社会学と社会科学におけるインディジニティについて」（橋本、二〇〇〇）という小論を発表している。前稿では、筆者が一九九七年一〇月に行ったヒアリング調査と資料収集、およびシンガポール社会学に関するリーディングスである *Understanding Singapore Society*（一九九七年）と題する文献を踏まえて、社会学の現状を紹介した。

その後、二〇〇二年八月一日～九月三〇日にかけて、筆者は、国立シンガポール大学教養・社会科学部日本研究学科に客員研究員として滞在する機会があった。今回はそこで得た知見を踏まえて、再度シンガポール社会学について論じることにしたい。前稿において、筆者は次のように指摘した。シンガポールにおける社会学者は、国立シンガポール大学社会学科に三五人、南洋工科大学と東南アジア研究所および民間機関に一〇人程度おり、

計約四五人となっている。国立シンガポール大学社会学科は、学科長、副学科長のほか、准教授四人、上級講師一四人、講師一四人、ティーチングアシスタント一人というイギリス型の大学である（なお社会福祉は、別に社会事業・心理学科がある）。シンガポール大学でＰｈ・Ｄ（博士号）を得たものは二名であり、それ以外の者は、主として英米の大学で学位を修得している。現実的な研究が中心で理論的関心は低い。シンガポール以外のアジアの大学で学位を得た者はいない。英語圏だからということだけでなく、学問の方向を読み取ることも可能であろう。

そこで、今回得た知見では、第一に、二〇〇二年度における学部レベルの教育の特徴と、第二に、二〇〇二年に刊行された *The Making of Singapore Sociology* について、紹介したい。

二　シンガポールにおける社会学カリキュラム

――国立シンガポール大学（ＮＵＳ）教養・社会科学部社会学科――

ＮＵＳでは、二〇〇二年八月時点で、社会学を社会構造と制度、および社会的行為者についての体系的な研究と批判的分析を目ざすものと位置づけ、相互作用を通じて社会構造と制度を造り出す存在と社会的行為者をみなしていた。そして、社会学科は、学生の社会学的視点を開発するとともに、階級、ジェンダー、エスニシティ、宗教、家族、教育、職業、組織、政治、大衆文化、およびそれらの相互関連など、多様な独自の領域を分析し理解するのに必要な、進んだ研究手段を装備しているセクションであるということであった。そこから、卒業生は、家族、職場、国民国家といった様々な社会的背景と文脈における、個人と集団行動の様々な局面に応用可能な社会的要因を分析し、批判できるように訓練されるのである。その結果、彼らは社会調査家、市場アナリスト、計

画検討者、広報の専門家、ジャーナリスト、公務員、人材供給業者としてうまく仕えられるようになるのである。ここで、就職先として社会福祉関係が除外されているのは、上記のように社会事業・心理学科が別に設置されているためである。

さて社会学を専攻する学生は、強い問題関心と、General Paper[1]を含むシンガポールケンブリッジ一般教育試験証明書上級レベル（G.C.E 'A' レベル）において立派な成績を修めた者でなくてはならないとされる。学生は三年次で卒業する者と、四年次まで進む優等学位を得る者に分かれる（Habibul Haque Khondker, 2000: 112）。

カリキュラム上の必要条件は、主専攻学生の場合、まず「社会という観念の形成」（Making Sense of Society）と「社会調査法」、「社会思想と社会理論」が必修で、二〇〇〇番台と三〇〇〇番台から一一科目（三〇〇〇番台から最低四科目）、計五六単位（セメスター制で、一四科目）を修得しなければならない。具体的に二〇〇〇番台と位置づけられるものは、「社会調査法」、「労働社会学」、「社会心理学」、「社会的不平等」、「家族社会学」、「文化と社会」、「東南アジアの民衆と文化」、「人口と社会」、「経済と社会」、「大衆文化と社会」、「医療社会学」、「逸脱の社会学」、「子供時代と青年期」、「マスメディアと文化」、「食べ物の社会学（the Sociology of Food）」、「感情と社会生活」、「観光旅行の社会学」、「比較、人間のセクシュアリティ」の一八科目である。また三〇〇〇番台は「社会思想と社会理論」、「開発と社会変動」、「人種と民族（Ethnic Relation）」、「教育社会学」、「政治と社会」、「都市社会学」、「親族と社会組織」、「社会と文化のなかの宗教」、「社会調査におけるデータ分析」、「ジェンダー研究」、「科学、技術と社会」、「現代東南アジア社会」、「目で見るエスノグラフィー」、「ライフコースと加齢の社会学」、「法と社会」、「自我と社会」、「エスノグラフィーを読む」の一七科目である。

優等学位賞を得たい学生は、さらに三二単位を追加する必要が有り、特に四〇〇〇番台から最低七単位を修得する必要がある。四〇〇〇番台とは、「現代社会理論」、「組織社会学」、「社会政策と社会計画」、「言語社会学と

コミュニケーション」、「都市人類学」、「社会学・人類学特論」、「人権の比較研究」、「身体と社会」、「解釈社会学」（Interpretive Sociology）、「移住の社会学」、「仕事と社会」、「社会の記憶」、「質的方法論」、「健康と社会特論」、「国家と社会問題」、「比較国家・社会論」、「市民権、国家、グローバリゼーション」、「同調、アパシー、反抗」、「福祉と社会正義」、「法と正義特論」、「社会運動と集合行動」、「卒業論文」（一二単位）の二二科目である。その他五〇〇〇番台と六〇〇〇番台があり、五〇〇〇番台は修士課程のカリキュラムと重複している。

これらの科目を毎年開講しているわけではないが、わが国の社会学科にも見られるベーシックな内容とともに、「観光旅行の社会学」、「比較、人間のセクシュアリティ」、「身体と社会」、「市民権、国家、グローバリゼーション」といったタイムリーなカリキュラムが並んでいることが分かるであろう。そこでユニークな内容を紹介しよう。基礎科目である「社会という観念の形成」（Making Sense of Society）は、社会制度と社会過程の分析に社会学を用いて分析しようとする学生を訓練するために、社会学と人類学の概念を紹介することにあるという。そのために学生は社会における自らの経験を二つの学問に関連づけることが奨励され、社会調査、家族、労働と組織、権力と国家、ジェンダーとエスニシティを含む社会的不平等、マスコミュニケーションと大衆文化、価値と信念、逸脱と社会統制などの、論理と方法を学ぶものである。ここで人類学の概念を社会学と並んで勉強しなくてはならないのが注目されるが、いわゆるわが国における社会学概論ないしは社会学入門に該当することが分かるのである。

「東南アジアの民衆と文化」では、人類学と社会学という視座から土着の（indigenous）東南アジアの社会―文化的次元、国家および国家形成、その部族・農民社会への影響、東南アジアの多様な物的環境への経済の適応、宗教と政治システムの間の相互関係、国民国家と民族、東南アジアの近代的発展などについて、検討するものである。さしずめ、わが国ならば「日本社会論」に該当するが、わが国の社会学科には「東アジア社会論」はない

であろう。東南アジアの小都市国家ならではの科目である。関連して「人種と民族（Ethnic Relation）」、「移住の社会学」についても触れておきたい。「人種と民族（Ethnic Relation）」では特に目立った特徴はないが、特定の国々の人種／民族とエスニシティを理解し分析するために――特に東南アジアにおける民族を、理解し分析するために――人種、エスニシティ、人種主義という概念と人種／民族モデルが、提供されるというものである。その際、社会学的・社会心理学的視座が概念の議論と経験上の問題のために探究される。シンガポールは、マレー世界に囲まれたなかでの華人中心国家で、二〇〇〇年時点で華人が七六・八％、マレー系が一三・九％、インド系が七・九％、その他が一・四％という多民族国家であるという背景のゆえに、「人種と民族（Ethnic Relation）」という科目を不可欠なものにしているのである。そして実際には、この公式四人種モデルは、さらに細分化されざるを得ないのである。

「移住の社会学」では、その主要な現代的問題（issues）と、そのルーツに根ざす諸問題（problems）、個人的、社会的、およびグローバルなレベルにおけるその結果について取り扱うものである。とりわけ、移住のプロセスと、エスニック・グループの形成、戦後移住のパターンと、国際的移住のグローバル化、アジア・太平洋での新しい移住、労働力移住とマイノリティ、シンガポール、マレーシア、ブルネイにおける移住のプロセス、新しいエスニックマイノリティと社会、移住政策と政治、新世界秩序における移住などが検討される。そもそも、シンガポールは移民社会であった。東インド会社のトーマス・ラッフルズ卿がシンガポールを占領したのは一八一九年で、当時の人口はわずか一五〇人に過ぎなかった。そのうち一二〇人がマレー人で残りは中国人であった。そして、最初の一八二四年の人口調査では、人口は一〇、六八三人に達し、マレー系が六〇％、中国系が三一％、インド系が七％であった。いわば元来、移民社会であったシンガポールにとっては、「移住の社会学」はまさに根底をなす科目という性格を帯びているのである。一八八一年から一九四七にかけての人口の自然増は二七、四

二六人に対して、移民は八六三、九七二人に達したのである（シンガポール日本人学校中学部、一九九四：一四、Saw Swee-Hock, 1999: 10-11）。

「社会思想と社会理論」は、もちろんユニークな科目ではない。わが国におけるいわゆる社会学史ないしは社会学思想史に該当する部分である。これは近代社会の形成という社会過程の多面的分析を強調した、古典的社会理論の中心問題を批判的に検討することにある。そのため、マルクス、ウェーバー、デュルケームといった主だった理論家達の独創的な貢献に集中し、その著作がいかにして現代社会学に影響し続けるかを探究するものだという。ここで、筆者がこの科目を取り上げたのは、二〇〇二年八月から九月にかけてシンガポール滞在中に会った社会学を副専攻とする学生の話を紹介したいからである。その学生の話では、マルクス、ウェーバー、デュルケームも、原文（英語の）をプリントで学んだということであり、ギデンズについても知っていた。シンガポールにおける二〇〇〇年の大学進学率は二一％、四九、八五六人が通い、ＮＵＳの大学生数は二〇〇〇年時点で二二、〇三八人（二〇〇一年は二三、〇八六人）であった。わが国の大学進学率が三八・二％（一九九九年）であるから、はるかにエリートではあるとはいえ（橋本、二〇〇二）、勉学の姿勢の違いを垣間見ることができよう。

「食べ物の社会学（the Sociology of Food）」というのも、極めてユニークな分野である。何が食べ物となり、それゆえ何が食べられるか、いかに準備され、もたらされ、消費されるか、誰と食べるかなどは、階級、エスニシティ、ジェンダーという複雑な関係を表現しているので、食べ物は社会現象だという。講義は、複合的な社会的ネットワークに好んで用いられ、影響を及ぼす、日常生活の素材の背後にある複雑性を暴露するものであり、その点で、食べ物というのは、階級、エスニシティ／人種、性／ジェンダーが社会的に構築される、素材と象徴だとみなしている。この観点は、いわゆる社会構築主義と文化的再生産論の立場を示している。食べ物とその社会的・政治的諸次元の複合的な意味付けを導きだすことを通して、食べ物の選択、準備、共有という「当然の経

験」を、広範な文化的文脈に再定置しようというものである。〝食はシンガポールに有り〟といわれるほど、多様な文化的背景を持つおいしい食事の十字路であって宗教によって食事制限が明確なシンガポールならではの講義科目と言える。

さて「社会の記憶」を見よう。記憶――覚えている――という行為は、心理学や哲学の研究主題であった。だが記憶は明らかに社会現象である。あらゆる個人にとって、記憶は社会的アイデンティティの不可欠かつ消すことのできない一部であるからである。過去を思い出すという行為は、個人的にも集合的にも、選択的である。それは、要するに、過去の特定のバージョンを構築する行為であって、いいかえれば、それは絶えず政治的なものであるという。社会の記憶研究は、思い出の「公的形態」よりも「大衆的形態」と、両者の相互作用と緊張を強調することである。とはいえ、記憶の「大衆的」カテゴリーそれ自体が、世代、ジェンダー、階級、エスニシティに関連して大きな差異を含んでいるのである。具体的に利用しうる記憶装置の一つとしては映像が考慮されるし、現地への訪問も考えられている。「社会の記憶」という表現は、きわめて斬新な発想であり、わが国においては、社会史、歴史社会学、社会心理史という分野に含まれるのであろう。

「市民権、国家、グローバリゼーション」では、市民権いわゆる citizenship の概念は、社会学の積年の関心事であったという。わが国でも、マーシャル＝ボットモアの『シティズンシップと社会的階級』が岩崎信彦氏等によって翻訳され、少なからぬ議論になった。伝統的に市民権は、人権、文化、人種といった多様なプロセスに関わりながら、個人が国家に結びつくプロセスとして理解されてきた。それがグローバリゼーションに関わって新しい主張が生まれ、柔軟な市民権や脱領域化した国家といった市民権と国家についての新しい再定義が生じてきたのである。そこでこの科目では、人の移動、資本、観念が市民権にどう影響を及ぼし、それが国家と社会との関係にどう影響するのかということを、取り上げるものである。いわゆるポストモダン状況と進展するグローバ

リゼーションの脅威の下で、いかにエリートが国家意識を植え付けられるかが、課題であるという。

移民社会を基礎にしたシンガポールは、一九六五年の独立以来、多文化主義と二言語主義をとりながら多民族国家を形成してきた。シンガポールにとって、シンガポール人としてのアイデンティティの確立は、国家存立の課題であった。ゆえに、「いかにエリートが国家意識を植え付けられるかが、課題である」という文章も、上記のような文脈の下で理解しなければならないのである。さらに、今日的には多くのフィリピン女性などがメイドとして各家庭に雇われ、三〇・九％のインド系のシンガポール人が外国生まれであるという現実も〈国家と社会〉という連関を、考えさせられる契機になっていると言えよう。

最後に、「同調、アパシー、反抗」を見ておきたい。この科目は、日常的な状況から大規模な社会闘争に至る、様々な社会的文脈の協力・非協力・異議申し立てについてのミクロ・マクロレベルの基盤を検討するものである。具体的には、農業社会、工業社会、脱工業社会で生じているこれらの問題に言及する。同調、アパシー、反抗といった社会生活のこれらの条件の各々は、創造され維持されるように取り組まれる。そこからこれらの条件の各々が、生活に引き起こす構造的・媒介的要因を検討するものであり、ある条件から他の条件へ――すなわちアパシーから反乱へ、反乱から同調へと――徐々に移行する際の決定的転機を探ろうとするものである。わが国でいえば、集合行動論や社会運動論のテーマにあたるものだが、人民行動党下の強力な政権が独立以来継続している下で、このような科目が開講されているあたりに、学問の自由がそれなりに認められている様子を伺える。

上記のタイムリーなカリキュラムは、わが国であればいわゆる特殊講義や、ある科目で実質的に講義がなされることがあっても、カリキュラムの一つにおくことはまれであろう。その意味では、社会学のベーシックな内容と現代的テーマを縦横に配置したカリキュラムといえる。それゆえ「ＮＵＳのカリキュラムがますます柔軟で全体論的になっていく」という指摘は、的を射たものといえよう（Foo Siang Luen, et al. ed., 2002: 226）。

三　『シンガポール社会学の形成』をめぐって

(1)〈近代化〉(Modernization) と〈近代性〉(Modernity)

二〇〇二年、*The Making of Singapore Sociology* が刊行された。筆者は、シンガポールのチャンギ空港内の書店で本書に接したとき、驚きを禁じることができなかった。というのは、一九九七年に *Understanding Singapore Society* が上梓されたのを知っていたからである。当然最大の関心事は、両者の違いが何処にあるのかということであった。後者について、前者の編者達は、次のように指摘する。*Understanding Singapore Society* は、簡単に近づくのが難しかったシンガポール社会の時代に実施された広範な研究を、学生に利用できるようにした。タイムリーな社会学研究の財産目録ではあったが、それは大学院生や研究者向けのリーディングスを意図したものであった。これに対して、*The Making of Singapore Sociology* は、ある分野における重要な展開を検討し、経験的研究を提示し、理論上の問題に照らしてその貢献を評価することにある（Tong Chee Kiong and Lian Kwen Fee, eds., 2002: iv）。つまり、前者がリーディングスなのに対して、後者は経験的社会研究史であるということである。

さて本書は、全部で四六七ページに達する大著である。第一部は〈近代化〉(Modernization) からなり、第二部は〈近代性〉(Modernity) からなる。〈近代化〉に属するのは、「シンガポールにおける開発社会学」、「シンガポールにおける都市研究」、「家族社会学」、「教育」、「シンガポールにおける労働社会学」、「医療社会学」、「階級・社会階層」の七分野である。

これに対して〈近代性〉に属するのは、「シンガポールにおける〝人種〟と民族」、「中国人の社会学」「マレー

人の社会学」、「インド人の社会学」、「誰がだれに何を語るか」、「宗教」、「犯罪と逸脱」の七分野である。〈近代性〉のかなりの分野は、とてもユニークであるが、〈近代化〉に比べると何故〈近代性〉なのかが分かりにくい。本書には何故〈近代化〉と〈近代性〉なのか、この点の明瞭な説明がない。編者達によれば、シンガポールの初期の社会学は、近代化論とその開発社会学への応用によって影響を受けて来た。経済学者で副首相であるゴー・ケン・スイは、東南アジアの発展途上の社会が〝離陸する〟ために、シンガポールの社会科学の発展に対して、強い関心を持った。その論理は、次の通りである。リーディングセクターとしての製造業が、新技術と［労働者に］新しい社会的態度を生み出し、既存の技術レベルを向上させ、失業者や不完全就労者に対する雇用を提供する。だがそれらの躍進は強力で永続的な政治制度、特に政府と教育の質によって生み出されるのであって、都市において最も効果的に起こるというものであって、近代化論を展開した。それでこれらを類推するならば上記領域が〈近代化〉に属すると読み取れるのである（Lian Kwen Fee and Tong Chee Kiong, 2002: 4）。

それでは〈近代性〉については、どうか。シンガポールは西欧近代（modernity）の産物であった。西欧近代は、残りの世界に三つの決定的な構造、資本主義、産業主義、国民国家を伝達した。そして、現在の〈近代性〉概念は、ルーマンを援用するならば、経済から文化へ移行しているという。すなわち〈近代性〉は、第一にこれまで見られなかったやり方での時間―空間を超越した近代的なライフスタイルの経験、すなわち消費意識と功利志向に関わり、第二に国民国家の文化と国家史、およびその起源と神話は、アイデンティティの構築と維持のために、いかに大衆文化を通じて維持されているかを、取り扱うということなのである。歴史的にも立地的にも、シンガポール人はグローバルで地域的な、国民的で、種族的でエスニックで、複雑な文化宇宙のなかで居住しているのであって、社会科学者が、シンガポールの社会景観における最重要な影響を確認する必要が生じるならば、エスニシティと政府に帰着するのは間違いない（Lian Kwen Fee and Tong Chee Kiong, 2002: 11-12）。こうして

〈近代性〉に包含される上記七分野が配列されるのである。

ここでは、筆者の専門である都市についての研究と、シンガポール人の多数派である「中国人の社会学」について紹介しておこう。

(2) シンガポールにおける都市研究

シンガポールにおける都市化文献は、筆者も良く知っている国立シンガポール大学の社会学科長であったホー・コン・チョン（何光中）によれば、社会学に加えて地理学、歴史学、経済学、政治学という学際的で広範な基盤を持つものであって、都市研究は、多くの政策に動機づけられたイニシアチブによって特徴づけられてきたという（Ho Kong Chong, 2002: 52）。それはある期間、特に住宅・都市人口統計学において、最良の統計的輪郭を累積的に提供してきた。英国の植民地時代には発達した制度的な背景がなく、真面目な試みは、希薄で散発であった。植民地時代に比較して植民地後の開発の土着化した局面では、文献はその多様性によって特徴づけられた。かなりたくさんの都市研究が、政府の業務と関連づけられていて、植民地時代にはデータの体系的かつ規則的な収集よりは、むしろ文献のタイプは、諸問題を検討するための業務であった政府の委員会の結論であった。一九七〇年代・八〇年代になると政府関係機関の業務が多くなるのが特徴であるという。

都市研究の各種の構成部分については、経済地理学者と歴史学者による長期かつ絶えまない伝統がある。彼らは植民地における港湾都市としてのシンガポールの開発を理解し、その役割の経済的重要性を査定しようと試みたのであった（Ho Kong Chong, 2002: 56）。そしてこれらの都市構造と機能に関する文献は、二つのレベルにおいてシンガポールの開発に関する包括的説明を提供してきた。一つは、東南アジアの変動する対外的経済・政治環境とこの環境内におけるシンガポールの役割についての研究である。第二のレベルはシンガポール経済におい

てますます仲継貿易が優勢になることと、これが都市の内的発展にもたらした影響についての説明である。かくして、貿易、通信、輸送の間の相互作用は、英国の経済と政治的利害のための重要なセンターとしてシンガポールを位置づけるための、インフラストラクチュアを提供した。そして、そうした利害はシンガポールの存立と持続的繁栄を保証するものであった。

社会学者が、シンガポールの都市研究に対して貢献してきたのは、都市の社会構造を理解しようとしてきた部分にある。一九五〇年代の社会学研究が都市の過密と貧困に関心があったとしたら、一九七〇年代はコミュニティの追求であったという。工業化の結果としての都市国家の急速な社会変動と、公共住宅の導入、そして都市再開発計画に社会学者達は注目した。その結果が、如何に家族がその近隣関係の変ぼうに対処したかという〝再配置研究〟の多大な集積であった。我が国で訳出されたごくわずかなシンガポール社会学の文献『シンガポール社会の研究』(Chen and Evers eds., 1978) にも、「高密度社会の社会心理学的意味」という形で、公共高層住宅居住の問題が取り上げられていた。ホー・コン・チョンも、チェンの本について構造的諸変動と住民への影響を取り扱った本の一つとして言及している。

ホー・コン・チョンはまた、都市のサブカルチュアとしての青年研究について言及する。シンガポールの若者は、メディアと研究者によって関心を向けられてきた。シンガポールのメディアは、表面上の過度の消費や物質主義的で〝西欧化〟した若者の態度を攻撃してきた。こうした反発を説明することが、都市の青年文化研究の一つの入り口となってきたと指摘する。もう一つの入り口が、非行少年の研究である。逸脱研究で一般的な、相互作用論的立場をとることでプロセスの分析を強調してきた。非行少年のサブカルチュアは社会統制の担い手(例えば、法執行官や教師)の態度と行為の帰結であり、いかに社会統制の担い手達の反応が次第に若者の一定部分(労働者階級の青年や低学力者)を疎外することへと作用するかということに、議論はあるという。

都市の政治とガバナンスについても彼は言及し、国家－社会関係や経済の国家管理といったいくつかの方向でそれが発展してきたことを指摘する。シンガポールの経済的成功という点は、国家計画の一般的援助を通じたものであったので、関心はいかにこの正統性が成し遂げられたかにあった。東アジア経済の急速な成長は、ミドルクラスの拡大へと導いてきた。こうしてシンガポールにおけるミドルクラスが市民社会の勃興への条件へと導き、政府への参加が増加したかどうかという問題へ議論は向かうことになった。

一九八〇年代の産業政策に伴って、シンガポールは電子・医薬品というハイテク産業への投資先となり、経済リストラの結果シンガポールのリージョン化が試行された。新しい拠点は、他国のためのホテル経営、エアポートと港湾管理、都市計画面での専門化されたサービスを提供することであった。リージョン化は、シンガポールが地域のキー都市ないしは、ハブ（中心）都市であるということに基づいていた。製造業への依存から、地域およびグローバル経済におけるサービスセンターと基軸経済の結節点への移行は、グローバル都市としてのシンガポールの新しい役割の検討という研究に着手させることになった。

都市研究の次の一〇年については、グローバル都市というシンガポールの地位に基づいた諸問題と関わっている。そこでは経済学、文化、政治学という三つのタイプが想定され、社会組織と都市文化の研究は、都市研究者にとっての重要な分野になってくるであろうという。ハブ都市としての経済活動のフローだけでなくて、人と文化観念とイメージのフローという動態的なイメージが喚起され、アイデンティティ研究が研究者の関心として優勢になる。この指摘は、グローバル都市においてはナショナル・アイデンティティを構築する作業が、（エスニシティ、宗教、ライフスタイルをあてにした）競争志向と母国と結びついた新しい移民達に直面してますます難しくなるという提起と響きあうものである。筆者はここでM・カステルが、フローの空間という概念を提起したことを想起するが、その提起に関わる指摘だと言えよう。近隣コミュニティの問題は、その集合が単に利便性のた

めに存在するのか、あるいはライフスタイルとレジャーコミュニティによる競合にもかかわらず地域結合と地域感情が存在するのかどうか、という問題を再表面化させるであろうと、ホーは言及する。

シンガポールの都市研究を、都市の歴史的発展を縦軸にして、歴史学、経済学、地理学、政治学を含めて都市の社会科学として浮き彫りにするという彼の方法は、M・カステルに関心を寄せる彼の立場としては、当然であろう。だがそのことが、本書をシンガポール社会の学なのか、シンガポールの社会学なのかという別の問題を喚起することになる。ガバナンスやグローバリゼーションといった我が国の都市・地域社会学においても論議されているテーマが取り上げられていて注目されるが、都市・地域社会学的には、フローの空間の経験研究への適用という問題は、興味深い。

(3) 「中国人の社会学」

カク・キアン・ウーン（郭建文）は、この章において「シンガポールにおける中国人」についての社会調査研究をレヴューするという。だがそもそも「『中国人』が意味するものは何か」という問いに答える必要が生じるのであり、それは非歴史的なものではない、と指摘する。「シンガポール中国人社会（Singapore Chinese community）」という用語は、そのメンバーが共通の文化的特徴を共有する単一で、多かれ少なかれ極めて限定された社会集団という観念を意味し、標準北京語での共同体としてのあるいは集団（華人社群ないし華人族群）としての中国人（華人）を記述する時、この観念は強まるという。[2] 特にエスニック・グループ（族群）に関する中国語は、民族という用語とオーバーラップするのであり、後者は「人種」、「人民」、および「国民（nation）」といった集合性の概念と様々にオーバーラップする。

だがこのような意味づけはシンガポールにおいては、問題だというのがカクの提起である。「中国人であるこ

と」の多様性、およびいわゆる中国人社会内部の多様性、歴史的に位置付けられた様々なグループ間の差異ということは、重要な研究領域なのであって、シンガポールの非中国人人口が二二％以上あり、複合民族ないしは〝複数的〟なので「中国人社会」としてシンガポールを規定しないし社会学的に見なされるべきではないと指摘する（Kwok Kian Woon, 2002: 247-248）。ではシンガポールにおける中国人研究はいかなる研究領域や軌跡において展開されてきたのであろうか。それは以下の六つの分野からなるという。

第一に、シンガポール社会ないしはより一般的にシンガポール研究として、シンガポール社会の形成における中国人ということが、特に植民地期およびその後のポスト・コロニアル期の多民族社会における中国人アイデンティティの歴史的展開が、取り上げられてきた。

第二は、中国学ないしは中国人研究として取り上げられた。そこでは、「中国人諸社会」研究との関連でシンガポールにおける中国人社会が取り上げられ、中国人の諸制度と諸実践の比較研究として、そして後期中華帝国ないしは近代中国研究として行われてきた。

第三は、東南アジアないしは南洋中国人研究の一部としてのシンガポールにおける中国人であり、他の東南アジア社会との比較によって、その社会の特殊な性格に光明を投げかけるものとして行われてきた。

第四は、海外における中国人研究であり、華僑ないしは海外華人としてのシンガポールにおける中国人研究であった。

第五として、東アジア研究としてであり、「儒教」および「工業化した」東アジア、ないしは「大中国」あるいは「文化的中国」の一部として優勢を誇る中国人社会としてのシンガポールの研究であった。

第六は、中国人の離散（diaspora）研究ないしは（一般的な）離散研究として、グローバルな中国人離散の一部、および他の離散者達との比較においてシンガポールの中国人研究が実施された。

具体的に、歴史的に研究を鳥瞰すると以下のように示される。

一八一九年は、「近代シンガポール」の端緒をなすが、一八四〇年代に初期中国人移民の社会・経済生活についての学問的研究が発表され、嚆矢をなした。その一つは中国生まれの苦力に関するものであり、母国への毎年の送金の研究である。もう一つは中国人の職業パターンについての研究であった。後者を通じて「マラッカ人」と称される海峡中国人が主に労働者階級の出身ではなかったことが示された。[3] また世代を超えて地域に深く根付き、英国支配を後ろ楯にして経済的にも社会的にも栄えてきた中国人の一文化集団であるババ（Baba）についての多くの研究が現れてきたと指摘する。先の『シンガポール社会の研究』にはマック・ラウ・フォンが、「シンガポールとマレーシアにおける華人秘密結社間の紛争回避メカニズム」を書いているが、カク・キァン・ウーンはマックのその後の研究に言及しながら、現代シンガポールにおける中国人秘密結社の持続的存続を前提とするならば、植民地社会におけるこの種の団体の役割と機能に関する理解を発達させることが必要だと、述べている（Kwok Kian Woon, 2002: 258）

第二次世界大戦に先行する数十年の植民地秩序において、中国の政治的・地域的リーダーシップの構造と中華総商会、マラヤ国民党運動（Malayan Kuomintang Movement）、マラヤ共産主義運動を含む特定の組織や運動についての研究を焦点として、中国人の社会構造についての研究が、歴史家達によって大規模に取り扱われてきた。カクが、その時期の中国人研究の欠落として強調するのは、以下の五つの分野である。第一に、知的歴史も知識人の社会学も、シンガポールでは未開拓な領域であり、第二に「エリート」だけではなくて「大衆」によって経験された歴史的瞬間に現われた運動も含めて、「コミュニティ・リーダー」の研究は社会的・知的運動研究を伴わねばならないということである。第三に、中国人の社会的差異のパターンについての研究は、幇派とともに、ババと新客（sinkeh）に代表されるものよりは、それ以上になされる必要があるということである。さらに第

四として、戦前の数十年の間の「マラヤ人化」の過程については、中国語文献以上にほとんど研究されていない。そして、五番目は、社会史的視座からのあるいは――下からの歴史――という「無名」または「大衆」の研究、および日常生活の社会学が、シンガポールの中国人についての文献においては一般に未開拓であると指摘する。

日本占領期に入ると、一九三〇年代後半に、中国人達が抗日運動を広範に支持したために、シンガポールと中国においては虐殺の対象者として中国人が選びだされたので、シンガポールの中国人にとっては、深く傷付く経験であったと回顧する。マラヤにおける中国人の抵抗については、中国人学者達によってかなり記録されてきた。我が国でも紹介されている許雲樵・蔡史君編『新馬華人抗日史料　一九三七～一九四五』（一九八四年、邦訳『日本軍占領下のシンガポール』青木書店、一九八六年）はそうした例の一つである。そして国民党の戦いを象徴したリム・ボー・センはシンガポールでは戦争の英雄であるが、マラヤ共産党と確認された人々の戦い、とくに抗日人民軍、の努力は、シンガポールでは関心を得なかったという。これは公的な反共イデオロギーのためであって、国民国家としてのシンガポールの視座から書かれた、あるいはそれを代表する歴史の場合にもそうだと指摘する。確かにリム・ボー・センについては、シンガポールにおいて劇画にもなっているほどである（Show, 1998）。

独立後の中国人に関する学問的文献の多くは、「アイデンティティの政治」と名づけられるものを焦点とするようになり、近年社会学者による貢献が目立つようになったという。それは社会学と歴史学の伝統的で人工的な差異を反映したものにすぎず、実際社会学は、「現在史」の研究として見なすのが適切であると提起する。一九六〇年代中葉には、国家が、新しい国民国家におけるイデオロギー的枠組を構築し、イデオロギー的合意を獲得する上での積極的役割を演じてきた。これは言語計画、教育、および文化計画の諸領域での複合的政策に接点を有していた。多民族主義関連の政策研究は、ベンジャミンの一九七六年の人種、エスニシティ、言語に関わる「文化的論理」と効果についての論文が端緒であると論じている。このベンジャミンの一九七六年の論文、“The

cultural Logic of Singapore's Multiracialism”については、前述の*Understanding Singapore Society*に再収されている。

華語教育の問題では、特に記憶の社会学と「中国の独特な政治」に関わって、多くの面で研究の余地があり、結果として、研究は「中国語知識人」（華文知識分子）という現象に向かうだろうと指摘する。若く、バイリンガルで、中国語を話す世代の知識人が、華語教育の衰退に直面していた以前の世代のように彼らが関わってきた言語、教育、文化との分断を推し進めるだろうという。特にこのことは、過去のアイデンティティの政治から距離を置き、広範な国家的問題について語り、自らを伝統を保護する役割以上のものとしてみなすようになった、若干の若い華語を話す世代の関心を象徴するものである。そしてこれは、結果的に、社会変容とモダニティの問題と関わっていると指摘する。

結論として、カク・キアン・ウーンは、今日の個人の選択が明白に拡大するという条件の下では、『シンガポールにおける中国人の研究』は、そのタイトル自体を超えた変容に向かうかも知れないし、人々が自らを確認するやり方が、多くの包括的で柔軟なやり方の結果として、やがて「中国人」という用語では、ほとんど何も含まなくなるかもしれない、と指摘する。

彼は、いわゆる公式四人種モデルを超えて中国系シンガポール人を分析し、歴史社会学的研究の課題として、かなり突っ込んだ指摘を行っている。そのことは、彼が今ＮＵＳの教員をやめて、シンガポール人の従来の思考態度を改めたいと考え、理想主義に基づくCruxible社の社長となっていることと関係しているのかも知れない。Cruxible社は、デジタル時代の技術と芸術の共同作業を促進するために、情報、教育、レクリエーション、環境といった領域に関心があるというものであった（Kwok Kian-Woon, 2000: Cruxible）。

さて再度「中国人の社会学」に戻るならば、シンガポールにおける中国人研究の大部分は、歴史学者によって

なされてきた。だが学問的差異と分業は表面的で有効ではなく、歴史学と社会学は相互補完的であらねばならないと、カクは指摘する。もし彼の意見に従うならば、何ゆえ、論文が「中国人の歴史社会学」ないしは「中国人の社会史」ではなく「中国人の社会学」であるのか問われる必要があるだろう。

むすび

以上シンガポール社会学の現況について垣間見た。これらを通じて次の点を指摘できよう。第一に、大学教育の一環としての社会学は、ベーシックな基本教育だけではなくて、きわめて今日的なテーマが取り上げられており、我が国においても見習うべきものと言える。

第二に、大学教育とカク・キァン・ウーンの「中国人の社会学」を通じて「記憶の社会学」が浮かび上がったが、我が国流に言えば社会史、歴史社会学ないしは社会心理史ということになるのであろう。客観的な社会変動と主観的な生活世界を接合させるものとして、検討に値しよう。

第三に、『シンガポール社会学の形成』を垣間見ることによって明らかなことは、ここの社会学においては社会学研究とは、いわゆる社会学ではなくて、社会諸科学として研究されているということであり、経験的社会研究に基づくものであるということである。それは、シンガポールにおける社会調査史と表現するのが誇張だとすれば、経験的社会研究史であるということである。従ってそこでの理論化は、社会学的一般理論化ではなくて、中範囲の理論化として積み重ねられていることが分かる。

第四に、翻って我が国の社会学史を想起するとき、何ゆえ理論史としてあるいは社会学思想史としてそれが展開されてきたのかという問題に、我が国の場合、川合教授とともに突き当たるのである。

第五として、前稿において、現実的な研究が中心で理論的関心は低い。シンガポール以外のアジアの大学で学位を得た者はいない。英語圏だからということだけでなく、学問の方向を読み取ることも可能であろう、と指摘したが、カク・キァン・ウーンの「中国人の社会学」を読む限り、彼がM・ウェーバーの研究者だということもあるとはいえ、現実的な研究が中心で理論的関心は低いと指摘したり、単純に学問の方向を読み取ることが可能であろうと述べるのは、言い過ぎだと言えよう。(4)

とはいえ、最後に、『シンガポール社会学の形成』においては、前稿で指摘した、インディジニーアスな社会科学(5)という問題は論じられていなかった。それは何故なのだろうか。実は一層検討が必要な課題に思われてならないのである。

(1) シンガポールケンブリッジ一般教育試験証明書上級レベルは、すべての大学入学を目指す者が合格しなくてはならないが、General Paperはその一部で小論文（Essay）と英語の知識の試験からなる。

(2) なお本節では、英語のChineseを本来シンガポールで使われている華人という用語を用いず、中国人と呼んでいる。これは中国語の*huaren*を華人と使っていることと区別するためである。

(3) 竹下秀邦（一九九五）によれば、海峡華人とは、マラッカ海峡域に代々住み、中国語を失って、マレー語を話し、マレーの風俗を取り入れたグループを指すと指摘している。

(4) この点に関連して、ハビブル・ハクェ・コンドカーは、シンガポール社会学の形成期においては、アメリカスタイルの量的、問題解決志向の社会学が優勢で、社会学が政策に対して関心を示したのに対して、社会人類学は学問的志向が強かった。だがその後、一九九八年五月時点で社会学科三三人のシンガポール以外の出身地は、マレーシア、香港、台湾、中国、インド、バングラディッシュ、イギリス、アメリカ、コロンビアであり、彼らの問題関心は多様であると指摘する。そして、学部の研究結果を反映した社会学の増大する多様化は、シンガポールの社会学の成熟を示しており、政策を焦点とする研究と理論を焦点とする研究のバランスは学科にとっての良き前兆であると述べてい

る（Habibul Haque Khondker, 2000: 109; 120）。

（5） インディジニーアスな社会科学とは、社会科学の土着化をはかるために、適切な概念と方法を開発し、西欧的環境で発展してきたものに修正をはかるという考えをもつ社会科学的方法であった。

文　献

Chen P. S. and Evers, H. D. eds., 1978, *Studies in ASEAN Sociology: Urban Society and Social Change*, Chopman Singapore.（ピーター・S・J・チェン編、木村陸男訳『シンガポール社会の研究』めこん、一九八八年）

Cruxible, http://www.cruxible.com/corporate_about.htm

Department of Sociology, National University of Singapore, http://www.fas.nus.edu. sg/soc/

Foo Siang Luen, et al. ed., 2002, *Singapore 2002*, Ministry of Information, Communication and Arts, Singapore.

Habibul Haque Khondker, 2000, "Sociology in Singapore: Global Discourse in Local Context," *Southeast Asian Journal of Social Science*, Vol. 28, No. 1.

Ho Kong Chong, 2002, "Urban Studies in Singappore," Tong Chee Kiong and Lian Kwen Fee, eds., 2002, *The Making of Singapore Sociology: Society and State*, Times Academic Press, Singapore.

Kwok Kian-Woon, 2000, "The Hub and The Crucible: Releasing Singapore's Creative Energy in the New Century," http://www.cruxible.com/articles_hub.htm

Kwok Kian Woon, 2002, "Sociology of the Chinese," Tong Chee Kiong and Lian Kwen Fee, eds., 2002, *The Making of Singapore Sociology: Society and State*, Times Academic Press, Singapore.

Lian Kwen Fee and Tong Chee Kiong, 2002, "Introduction: Constructing and Deconstructing Singapore Society," Tong Chee Kiong and Lian Kwen Fee, eds., 2002, *The Making of Singapore Sociology: Society and State*, Times Academic Press, Singapore.

Ong Jin Hui, Tong Chee Kiong and Tan Ern Ser, eds., 1997, *Understanding Singapore Society*, Times Academic

Press, Singapore.
Saw Swee-Hock, 1999, *The Population of Singapore*, ISEAS, Singapore.
Tong Chee Kiong and Lian Kwen Fee, eds., 2002, *The Making of Singapore Sociology: Society and State*, Times Academic Press, Singapore.
Show, C., 1998, *Lim Bo Seng: Singapore's Best-Known War Hero*, Asiapac Books, Singapore.
安啓春、一九八九、川合隆男・井田哲一訳「韓国社会学の先駆者　河敬徳」『法学研究』第六二巻第六号。
橋本和孝、二〇〇〇、「シンガポール社会学と社会科学におけるインディジニティについて―シンガポール社会学者からの問題提起―」『関東学院大学文学部紀要』第八九号。
橋本和孝、二〇〇二、「シンガポール・ファミリーサービスセンターの機能と特徴」『関東学院大学人文科学研究所報』第二五号。
シンガポール日本人学校中学部、一九九四、『資料集シンガポール』シンガポール日本人学校中学部。
竹下秀邦、一九九五、『シンガポール―リー・クアンユーの時代―』アジア経済研究所。